

わたしを顧みられる神

新しい主の年 2023 年を迎えました。ご一緒に礼拝をもって、この先行きの見えない時代の中を歩みだす恵みを感謝いたします。

新しい年の最初の礼拝はドイツのヘルンフト兄弟団のローズンゲン(日々の聖句)の年間聖句から説教をさせて頂いています。ご存知の方もおられるでしょうが、このローズンゲンは「信徒の友」の毎日の糧などのように、毎日を御言葉と過ごすことが出来るように工夫されたものです。ローズンゲンの場合は「くじ」によってその日の旧約聖書の御言葉を選び、それに対応した詩篇、福音書、書簡の聖句を一日ごとにまとめてあります。日本で販売されているものは簡易版で、旧約・新約のふたつしか載せていませんが、ドイツ語のものは4つの聖句、また讚美歌の歌詞が載っていることもあります。今年で 293 年目をかぞえるロングセラーです。このローズンゲンの意義について、最初のところに文章がありますので御言葉と共に生きる生活のためのガイドとして一部を紹介します。

読者の皆さま。会話は、話すお互いが、本心から相手への関心と理解を寄せて向き合う時、意味のあるものになります。お互いが相手の生活状況をありのままにとらえているなら、言葉数は少なくても十分です。そのような会話を引き出してくれるのが「日々の聖句」です。聖書のことばは、神とわたしたちとの会話のように、とても個人的なものになり得るのです。わたしたちが、その言葉のなかに自分自身の人生を再発見するとき、一時には驚くほどの的確に一、それは神との生きた出会いとなります。すべての言葉が即座に、自分の疑問や期待に応えてくれるわけではありません。謎めいた言葉や不愉快な言葉にも出会います。

以下、文章が続くのですが、おみくじと同じで、そこに神の意志が現れるという考え方ですから、まさにピンポイントでその日の御言

葉がわたしにとって出会いとなる、ああ、主は生きておられると告白するような体験を持つときがあります。そのローズンゲンの2023年の年間聖句が「あなたこそエル・ロイ(わたしを顧みる神です)」でした。最初、戸惑いました。旧約聖書であったことがひとつ。それからそれがハガルの言葉であったことです。しかし、この御言葉を2022年から2023年に足を踏み入れるわたしたちの状況や、世界の課題、世代の課題に重ね合わせてみる時、あらためてそこに御言葉による備えがすでに与えられているという思いに導かれ、主が共におられるとの深い安堵を覚えております。今朝はこの御言葉の説き明かしを通して、わたしたちの慰めがどこにあるか、共に聴きたく願っております。

まず最低限の確認ですが、ハガルは創世記に登場する女性で、下働きとしてアブラハムの妻サラにつかえていたエジプト人の女奴隷でした。この意味ではモアブの女性ルツと同じように、イスラエル民族ではなく、異邦人として、約束の民の周辺にいた人物でした。主人公ではないはずの人生が思いもかけない仕方でスポットライトをあびる。ある運命を担うことになる。わたしは実は、わたしたちの身の上に起きる出来事を運命という言葉で説明して、なんとなくあきらめをもって受け入れるのは好きではなく、むしろ運命を積極的にみずからに神が与えた召し、神に備えられ、そこで生きて御心を表すための使命として受け止めることが、わたしたちの信仰の戦いではないかと考えるものです。運命を使命に変えることができるのは召命、神の召しであり、それは神さまとの会話を通して実現します。まさにそのことがこのハガルのエピソードに示されています。最初に種明かしをしますとハガルという名前は「逃げる者」「逃亡者」という意味です。起きた出来事を受け止めきれずに逃げ出したハガルが神と出会い、自らの役割を生きることを通して神の祝福の御業を担ってゆく者へと変えられる。その彼女の人生を変えること

になった瞬間が「あなたこそわたしを顧みる神(エル・ロイ)です」という告白に刻まれています。この創世記 16 章に語られているアブラハムの家庭の問題、女主人サラとハガルのストーリーは旧約聖書ならではのもので、人間あるあるのオンパレードです。ハガルはサラの身の周りの世話をする端女でした。それをアブラハムとの間に子どもを生むことの出来なかったサラが、自分の侍女だったハガルを側女として差し出してアブラハムのために子孫を残そうとした。それ自体は当時珍しいことではなかったそうですが、ハガルにしてみればびっくりです。突如抜擢されたというか、ランクアップ。端女から、一族の血を残すための重要な役目選ばれます。そしてハガルが身ごもると、今度はサラがその喜びや輝きに、子どもを与えられなかった自分が軽んじられるようになったと感じる。こういう感情は主観的な要素が非常に強いですからなんとも言えませんが、実にありそうというか、本当にわたしたちと地続きの、他人事ではない出来事を描いていると思わされます。遊園地のシーソーのように家族のなかでアブラハムの世継ぎを身ごもったハガルが重くなれば、相対的にサラの立場が軽くなる。名誉が脅かされる。このことはサラにとっては脅威であり、屈辱ですから、アブラハムに地位の保全あるいは復権を求める訴えをし、同時にハガルには辛く当たった。そのためにハガルは逃げ出すのです。生涯で第一回目の逃亡です。そして、サラのもとから逃げたハガルは荒野のなかの泉のほとりで神の使いと出会います。わたしたちが人生から逃げ出す時、辛い状況から身を引き剥がし逃亡をはかる時、行く先が定まっていれば幸いです。シェルターになるような場所がどこにあるか、ハガルが生きていた場所や時代は身重の女性には過酷ですから、荒野のなかにある泉にとりあえずたどり着けたことにも神の守りがあったと見るべきでしょう。しかし、ハガルにしてみればこれからどうしたらよいのか、水を得て、一息つけましたが、先行きがはっきり

したわけではないのです。そこに神の使いが現れ、ハガルに語りかけます。それは身ごもったハガルに与えられた状況の捉え方を決定的に変える語りかけでした。今日は、その箇所は読まずに結論部分だけを切り取ったので、御使いがハガルに語ったことを聞いてください。

「あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか」

「女主人サラのもとから逃げているところです」

「女主人のもとに帰り、従順に仕えなさい」

「わたしは、あなたの子孫を数え切れないほど多く増やす」

「今、あなたは身ごもっている。やがてあなたは男の子を産む。

その子をイシュマエルと名付けなさい。主があなたの悩みをお聞きになられたから、彼は野生のろばのような人になる。彼があらゆる人にこぶしを振りかざすので、人々は皆、彼にこぶしを振るう。

彼は兄弟すべてに敵対して暮らす」

イシュマエルは砂漠にくらすベドウィンの先祖になったとも言われますが、大切なことは、神の使いとの出会いによって、与えられた御言葉によって、ハガル自身が状況を整理することが許され、ある落ち着きを得た。そして逃亡の向きを変えて女主人のもとに帰り、アブラハムの子どもを産むことです。ここから示されるのは創世記の出来事だから特にそう感じるのかも知れませんが、わたしたちが陥る感情の泥沼、混乱した状況、つまり形なく虚しくわたしたちを飲み込む混沌を制するのは神の言葉だという主張です。神が「光あれ」と語られて光が生まれ、そして次々に御言葉によってこの世界が形作られ、混沌が制御されていったさまが天地創造の出来事です。神の言葉は出来事となる。カオスに秩序を与える。混沌を制する力ある方のもとに生きることの幸いを思わされます。

さて地上の氏族はすべてあなたとあなたの子孫によって祝福に入るという神の約束はこの後、サラとの間にイサクが与えられて実現するのですが、この神の約束を信じられずに、なんとか血筋を残さねばと人間的な思いや、当時あたりまえのように行われていた習慣にのっとったゆえに、この家庭内不和というか、争いが生まれたわけです。それはアブラハムの家族だけでなく、神のご計画をも危機に陥れる出来事でした。その意味ではサラも、サラの提案を受入れたアブラハムの振る舞いも「信仰の父」どころか、不信仰の父のそしりを免れません。しかし、聖書に正しいひとは一人も登場しません。破れのない人はいません。そうした過ちある、罪ある人間をいかに赦し、祝福してゆくかに神さまの思いは集中しています。創世記の冒頭から「どこにいるのか」「なんということをしたのか」という神さまの問いかけがわたしたちに投げかけられています。ハガルは状況から逃げる者でした。しかし、神は使いを送って、彼女を引き止めます。「どこへ行こうというのか。女主人のもとに帰りなさい」。破れのある状況のなかに何も持たせずに返そうというのではありません。ハガルには神の言葉が与えられています。将来に対する約束です。これが大きい。ひとは約束によって今を生きる力を、耐える力を与えられる存在です。信仰を与えられているというのは、この神の言葉への信頼によって今を生きる力をいただくことです。「我弱くとも、怖れはあらし」と賛美することが出来るのです。神がわたしを顧みて下さるから。罪と死の問題を解決してくださっているから。そのことが判れば、この日を生きることが出来ます。わたしたちの現実の人生がきれいにまとまることはありません。わたし自身の歩みや家族の歩みを振り返ってそう思うようになりました。ドラマでしか起きないと思っていたような、え？という出来事も気づけば周囲にあたりまえのようにあります。人生が自分の思い描いたような57577の定型に収まることなどない。破調だらけ。わたしたちは

破綻している。しかし、神は見捨てられない。選ばれた者を見捨てられることなく、顧みてくださる。エル・ロイ(わたしを顧みてくださる神)は、やがてインマヌエルの神として、直接、わたしのところに飛び込んでこられる。飼葉桶に眠る幼子として、十字架の死によってわたしの罪を滅ぼしてくださる救い主として、そして、命のことばを日々、わたしに、あなたに、与えて下さるのです。自分で自分の人生を思い通りに生きて、落ちまでもきれいに付けたいと願うのはわたしども人間の見当違いでしょう。わたしたちは状況の支配者ではない。生まれる時、死ぬときは受け身です。世界の行く末もいったんサイコロを投げてしまえば、さまざまな人間の思惑や、想像外の力が働いて決して読み通りに進むことはないのだと国際政治や過去の歴史を顧みて知らされます。だからこそ、しでかしてしまったことに対し、状況から逃げる者であったハガルはわたしたちの合わせ鏡のような存在であると同時に、途方にくれるわたしたちを顧みられ、命の道を指し示される神を指し示した人として、異邦人に与えられた信仰のガイドとも言うべき女性なのです。

エルロイ、わたしを顧みられる神、その神がともにいます 2023 年をわたしたちは歩み始めます。この御言葉をたずさえて主の教会は進みます。あなたの上に、主の祝福が豊かにあるように。そして、御言葉に立ち返る喜びに満たされる一年となりますように。

お祈りをいたします。